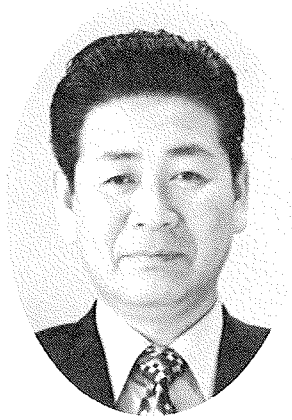


発刊にあたって



鹿 追 町 長

佐 渡 一 男

過去があり、現在がある、私達鹿追の住民は、本町の厳しい開拓の歴史を今あらためて振り返り、先人の苦闘に感謝する気持ちで一杯であります。

昭和56年8月、台風12号はともすれば安住に災害の恐ろしさを忘れていた私達に対して、一時は茫然自失、その為すべき事すら忘れる大被害を与えました。鹿追には災害は無い、ましてや然別川が氾濫する事などあり得る筈が絶対に無い、と信じていたのでありますが、その安易な考えはものの見事に打ち破られたのであります。

奥瓜幕から破堤した水流は、瞬時のうちに町内沿線の全域にまたがって河岸を決壊し、畑地を押し流し、人家を孤立せしめ、家畜をも濁流にのみこみました。住民は着の身着のまま待避、逃げ遅れたものは自衛隊の必死の救援によってゴムボートで脱出、菅野温泉は崖くずれで完全に孤立しお客さんが自衛隊のヘリコプターで救出、道々新得・本別線のアスファルト道路の路面を溢れた水が、さながら急流の河川の状態を呈しました。

鹿追市街の高校住宅から鹿追神社にかけての住民が福祉会館に待避、また然別川架設長大橋の瓜幕橋、紅葉橋、鹿追橋が破壊、ほかの万代橋、町の笹川橋、西瓜幕橋が橋台側の取付部分を大きく流失、

本町はまさに交通途絶、陸の孤島と化したのであります。

この大災害に対して、土木現業所を中心とする関係機関の対応は実に見事でありました。災害の恐ろしさにその対策に右往左往する私達に対して、次々のご指導を願い適確に再建復旧の方途を示して戴いたのであります。

更に建設省査定班、農林水産省査定班各位の問題把握の適確さにより、国の諸施策が次々と樹立されたのであります。

私はこの災害に遭遇し、職員と共に「災害は大変だった、しかし人間としてこの貴重な体験は求めて得られるものではない、苦しみを苦しみと考えず再建のための努力を尽くそうではないか」と話し合いました。

そして国の復旧に対する大方針が決定し、事業が次々と着工される中で、私は百年に一度という大災害に対して、町民はどう対応したか、どの様な状態であったか、その全容を後世に伝えなければならぬ使命感を感じたのであります。幸い理解ある議会の了承を得て今回災害の記録がまとまりました。

内容については未熟不徹底の面が多々あると考えますが、すべて生の声と写真を基本として集録いたしました。後世鹿追町の何らかのお役にたって欲しいと念願する次第であります。

過去、現在、未来、郷土鹿追は、その世代ごとのたゆまぬ努力と責任遂行によって限りなく発展する町であり、現在の私達は貴重な経験に対して悔いを残さざる後世への伝承を行うことを責務と考え、この冊子発刊の趣意とするものであります。

昭和57年9月